

瘍が認められ、CT では鼻腔を占拠し前頭蓋底に及ぶ enhance 効果陽性の mass lesion が認められた。生検にて診断後、放射線治療を行ない、腫瘍は著明に縮小したが、その後骨髄を含む広範な全身転移が認められた。化学療法を施行した結果、骨髄穿刺上98%を占めた腫瘍細胞は0.8%に減少し、一時末梢血に出現した腫瘍細胞も消失した。嗅神経芽腫は、一般に進行が遅く全身転移はきたしにくいとされるが本症例は、骨髄を含む広範な全身転移をきたした点で、きわめて稀な症例と思われた。

62) 頭蓋外への伸展を認めた髄芽腫の再発例

小保内主税・高橋 明 (岩手医科大学)
 村上 寿治・遠藤 英雄 (脳神経外科)
 芥木 巖・金谷 春之 (脳神経外科)

症例は5才、男児。昭和55年に右小脳橋角部腫瘍の亜全摘を受けた。組織診断は髄芽腫であった。昭和60年、右耳下腺部が腫脹、更に右VI、VII脳神経麻痺が進行した為、髄芽腫の再発を疑い、当科入院。入院時現症として右V～X、XII脳神経麻痺、右外耳道内及び右耳下腺部に腫瘍を認めた。CT上、右錐体骨尖部を中心に、造影剤により増強される abnormal high density area を認めた。入院後、局所に50 Gyの照射を行う一方、CDDP、ACNU等の化学療法を施行したところ、腫瘍は縮小、神経症状も改善した。髄芽腫が種々の転移、伸展形態を示すことはよく知られているが、本例の如き伸展形態は珍しいと考え、経過とともに文献的考察を加えて報告する。

63) Glioblastoma の髄腔内播種性転移
 — 自験例の検討 —

由良 茂貴・代田 剛
 苦米地正之・貝嶋 光信 (旭川医科大学)
 橋爪 明・関口ふく子 (脳神経外科)
 相澤 希・大神正一郎
 米増 祐吉

1978年当科開設以来組織学的に確認された glioblastoma 36例についてその髄腔内播種性転移に関し検討した。髄液細胞診を行った15例中9例(60%)が細胞診陽性で、さらに5例は播種による症状が出現した。この5例では1例を除き初発年齢は平均28.8歳と若く、また経過の長い例が多く、2例は初回手術の組織診断は astrocytoma grade II であり長期経過中に悪性化した例であった。全例髄液の蛋白値が100mg/dl以上の値を示し、播種の症状として水頭症を4例に認めた。

glioblastoma の25%に剖検上、脊髄への転移が存在

したとの報告もあり、長期生存後の再発、髄液蛋白高値、水頭症の合併する例などでは播種を防ぎうるなんらかの処置を考慮すべきである。

64) 3世代にわたるクルーゾン病の1例

菅野 三信・荒井 啓晶 (帯広第一病院)
 金子 宇一 (脳神経外科)

クルーゾン病は、頭蓋骨縫合の早期癒合によっておこる craniosynostosis の一つで、頭蓋骨のみならず顔面骨縫合の早期癒合も来たす craniofacial dysostosis であり、遺伝性にみられる事が多い。

今回我々は、3世代にわたるクルーゾン病の症例を経験したので報告する。症例は12才の男児で、視力低下を訴え、exophthalmus を指摘され当科を受診した。外観上、軽度の頭幅の拡大、両眼の離反と突出がみられ、頭蓋単純写でも著明な digital impression がみられた。この患者の母親、祖母にもみられ、3世代にわたる家族性のクルーゾン病と診断した。症例の呈示と若干の文献的考察を加えて発表する。

65) 巨大 encephalocystomenigocele の一例
 — 手術適応を中心に —

阿部 博史・土田 正 (新潟県立中央病院)
 森 修一 (脳神経外科)

症例は、妊娠末期に頭部奇形を疑われ、帝王切開にて出生した4020gの男児。外後頭隆起上部正中部の cranium bifidum に母指頭大の stalk を持ち、中に鶏卵大の脳組織を含む、14×12×10cmの巨大 encephalocystomenigocele である。全身の重症奇形はなく、CT上他に明らかな脳の構築上の異常も認めず、更に一週間の経過観察で十分な生存能力が確認されたので、生後8日目に修復術を行った。その後水頭症が進行し、35日目に VP shunt を施行した。現在中等度精神発育遅延を認めるものの比較的経過良好である。

本例を通して、予後不良が予想される encephalocele に対する我々の手術適応を述べた。

66) 脊椎披裂児の直腸肛門機能の検討

坂本 哲也・米谷 元裕 (秋田大学)
 菊地 顕次・古和田正悦 (脳神経外科)
 萱場 広之・加藤 哲夫 (同 第1外科)

脊椎披裂児に対し、排便管理の目的で、直腸肛門内圧を経時的に測定しているが、今回は、形成術前後における内圧測定のパターンの変化を検討した。

対象は髄膜瘤6例、脊髄瘤14例、脂肪腫4例で、い